

令和7年度
マレーシア・シンガポール
国際交流体験ツアー
報告書



千代田区

国際平和都市千代田区宣言

地球は 生命が息づく かけがえのない星
この地球を 平和と希望にみちた
輝く星にしよう

過去 私たちは 戦争を経験した
多くの人びとが傷つき 犠牲となった
二度と戦争が起こることのないように
かたく誓い いつまでも 後世に伝えていこう

現在 世界の各地で まだ争いがある
飢えて 苦しんでいる人びとがいる
地球環境の破壊が つづいている

今はもう自分たちだけの平和と安全を
考える時代ではない

国際都市千代田区に住み 働き 学ぶ私たちは
世界の人びとと 連帯して 核兵器をなくし
平和な世界を築きあげよう

未来に向かって 世界の人びとと 友好を深め
同じ地球の仲間として お互いを理解しあおう

私たちは 世界の恒久平和を 実現するために
積極的に 行動することを
ここに宣言する

平成7年3月15日
千代田区

はじめに

千代田区は、「国際平和都市千代田区宣言」に基づき、区民参加の海外事情調査事業（国際交流体験ツアー）を平成14年（2002年）度から実施しています。この事業は、区民の国際理解の推進のため、区内の青少年を海外に派遣し、貧困・環境・平和・人権等、人類が抱えている共通の課題に対し、主体的に考え、積極的に行動できる人材の育成を図り、地域社会における国際交流・国際協力活動の促進を図ることを目的としています。

令和7年（2025年）度は、12月8日から12月14日までの7日間、公募により選ばれた区内の高校生3名、大学生6名、社会人3名の計12名をマレーシア・シンガポールへ派遣しました。

マレーシアでは、東方政策元留学生同窓会（ALEPS）による講演を受けるとともに、世界遺産地区であるマラッカを訪問し、多様性に満ちた街並みを視察しました。シンガポールでは、民族文化地区を訪問したほか、スマートシティの取組みが進むプンゴル・デジタル地区を視察しました。また、日系事業所の訪問やシンガポール国立大学の学生との交流を行いました。

これらの経験を通じて、今回の派遣テーマである「都市開発・環境科学技術」「暮らしやすいまちづくり（スマートシティ）」「多文化共生」について学びを深めるとともに、国際的な視野を広げる貴重な機会となりました。

この報告書には、団員たちが現地の人々との出会いや様々な体験を通して感じたこと、考えたこと、そして将来への志などが、団員それぞれの言葉でつづられています。

本事業を通して、次代を担う団員たちが、身近な問題から地球上の様々な問題に目を向け、自分にできることを考え、実践してくれることを願っています。また、この報告書を手に取っていただいた皆様にとって、本事業が国際理解への関心を持っていただくきっかけとなれば幸いです。

最後になりますが、本事業を実施するにあたり、ご協力をいただきました全ての方々に厚く御礼申し上げます。

令和8年（2026年）3月

千代田区 地域振興部 国際平和・男女平等人権課

目 次

■ 01 団員紹介	03
■ 02 活動スケジュール	06
■ 03 千代田グローバルセミナー（事前研修会）レポート	
・ 第1回（マレーシア・シンガポールの歴史）	08
・ 第2回（マレーシア・シンガポールの多文化社会の比較）	12
・ 第3回（マレーシア・シンガポールと日本との環境分野での連携）	16
■ 04 現地報告	
・ 現地行程	20
・ マレーシアの基礎情報	22
・ マレーシアの活動地域	23
・ シンガポールの基礎情報	24
・ シンガポールの活動地域	25
・ 団員レポート	26
■ 05 募集案内・事前研修会チラシ	74
■ 06 広報千代田2月20日号への掲載記事	75
■ 巻末特集	78

01

団員紹介

今年度は、高校生3名、大学生6名、社会人3名の計12名が、ツアーに参加しました。地域社会への貢献、多文化共生への興味など、様々な想いを抱いて集まった団員の、参加に向けた意気込みを紹介します。

団長
大川 果音
大学3年



私は大学入学後、短期留学としてオーストラリアとカナダを訪れた。現地では先生方をはじめ、街の方々からも多くの温かいサポートをいただき、おかげで充実した学びと生活を送ることができた。この経験を通して、今度は私が日本に来る海外の方々に対し、同じように安心して過ごせる環境づくりに関わりたいと考えるようになった。そのため、多文化共生というテーマに深く関心を持ち、今回このプログラムへの参加を志望した。

副団長
柴田 珠和
社会人



私は仕事のほかに高校生へのキャリア支援や探究学習のサポートに取り組んでいる。今回の派遣では、マレーシアとシンガポールの多文化社会や教育・テクノロジーの現場に触れることで、異なる価値観や社会の仕組みを体感し、グローバルな視点を深めたい。派遣で得た学びは、若者の進路支援や探究活動に活かし、地域に還元することで、次世代が世界とつながるきっかけをつくりたい。異文化理解を通じて、教育と社会の接点を広げていきたいと思っている。

伊藤 萬結
大学2年



私は社会学部で学ぶなかで、多文化共生のあり方に強い関心を持ち、シンガポールは多民族国家として多様な文化や宗教が共存しており、その成功の背景にはどのような仕組みや価値観があるのかを現地で学びたいと考え、応募した。異なる文化を尊重しながら共に生きる社会づくりについて理解を深め、日本の地域社会にも活かせるヒントを探したい。

海老田 ふう
大学4年



大学で中国出身の友人と交流するなかで、日本で彼らが嫌だと感じた経験を聞いたり、自身も中国の文化に対して思い違いをしていたことに気づいたりした。この経験を通じ、差別や偏見をなくすためには、第一に相手の文化や価値観を知ることが重要だと感じる。多文化が共存するシンガポールとマレーシアへの派遣を通じ、グローバル化が進む日本において、多様な文化を持つ人々が互いを尊重し、共存していくための環境づくりについて学びたい。

01 団員紹介

大塚 史絵奈

社会人



私は医療従事者として病院で勤務しており、外国人のスタッフや患者様と関わる機会も多く、日々の業務の中で医療ケアや仕事に対する考え方が宗教や文化によって大きく異なることを実感している。千代田区の住民としても、多文化共生への理解を深めたいと考え応募した。今回の派遣では、マレーシア・シンガポールで暮らす方々と交流し、多文化共生の在り方や社会維持の仕組み、さらにDXの社会的活用について学びたいと考えている。

小川 日南太

大学4年



異文化交流を通して世界の課題を自分の目で確かめたいと考え、応募した。大学では経済を学び、授業でシンガポールの経済発展や資源の乏しい国土で豊かさを築いた背景について学んだ。留学では文化を伝える楽しさを感じたが、環境や貧困、平和といった社会課題に直接向き合う機会は少なかった。今回の派遣では、多民族社会として発展してきたマレーシアやシンガポールで、共生の仕組みや教育の役割を現地で見て学び、国際理解をより実践的に深めたいと考えている。

櫻井 晃太郎

大学4年



小学生の頃から貧困問題に関心を持ち、これまでさまざまな活動に取り組んできた。詳細については私の名前を検索すると確認できる。将来は、学びを生かして地域や世界の課題解決に貢献するため、国連で働きたいと思っている。今回の学びを今後の学習や活動に活かして、持続可能な社会の実現に少しでも貢献できる存在になりたい。

高橋 真衣

大学2年



多民族国家であるシンガポールやマレーシアを訪れることで、国際化社会が抱える多文化共生の難しさや、そこで暮らす人々のアイデンティティへの葛藤について考えたいと思い、応募した。事前研修や現地での活動を通して、シンガポールやマレーシアが異なる文化や宗教的価値観をどのように受け入れ、社会の統合を図っているのかを学び、日本と比較して考えることで、国際理解を深めたいと考えている。

福島 都

社会人



私は今まで生まれ育った千代田区を出る機会が少なく、異文化に直接触れる経験があまりなかったため、今回の派遣を通じて多文化共生のあり方を現地で学びたいと考えている。シンガポールやマレーシアでは、多民族が共生しながら経済発展を遂げており、文化や宗教の違いを超えて社会を支えている点に強い関心がある。現地での交流を通じて、多様性を尊重し協働する姿勢を身につけ、今後の地域社会での活動や人との関わりに生かしたい。

保立 美蘭

高校1年



高校進学後、留学生受け入れや英語でのインターンシップ、海外での現地の方々との交流を通じて、多文化共生の重要性を実感した。異なる文化や価値観に触れることで視野が広がり、語学力だけでなく専門知識の必要性も学んだ。今回、マレーシア・シンガポールで歴史や文化を理解し、得た知見を学校や地域活動に還元し、国際理解を広めていきたいと考えている。

茂木 茜

高校2年



私がこのプログラムを志望した理由は、アジアへの理解を深め、将来教員になるという夢へ踏み出す第一歩にしたいからだ。私は、他の国の文化や価値観を理解するには、自分で現地に行き、直接話を聞くのが一番だと考えている。この派遣では、マレーシアとシンガポールの多文化が共存する社会を、自分の目でしっかり見て学びたい。日頃から授業で練習している英語でのコミュニケーションを活かし、現地の学生と積極的に交流することで、今まで知らなかった多様な考え方を吸収したい。

米田 真生

高校3年



私は、マレーシアやシンガポールで行われている環境保全や多文化共生の取り組みを現地で学びたいと考えている。以前、国際協力プログラムで支援のあり方を考える中で、相手の立場に立つことの大切さを痛感した。今回の研修では、現地の人々との交流や施設視察を通して、共に課題を解決する力を養いたい。

02 活動スケジュール

日程		内容
説明会	2025年 10月15日(水)	・自己紹介 ・オリエンテーション ・千代田区の政策について 
千代田グローバル セミナー 事前研修会	第1回 10月24日(金)	マレーシア・シンガポールの歴史 講師：平島(奥村)みさ氏 (東洋大学社会学部教授) 
	第2回 10月29日(水)	マレーシア・シンガポールの 多文化社会の比較 講師：平島(奥村)みさ氏 (東洋大学社会学部教授) 
	第3回 11月12日(水)	マレーシア・シンガポールと 日本との環境分野での連携 講師：川又 孝太郎氏 (千代田区ゼロカーボン推進技監) 

日程		内容
結団式	11月20日(木)	式典 ・委嘱状交付 ・区長挨拶 
現地派遣	12月8日(月) ～14日(日)	マレーシア・シンガポール ※現地報告は、p20～ 
千代田グローバル セミナー 報告会	2026年 2月10日(火)	3班に分かれて発表 ・平島氏、川又氏等より メッセージ ・千代田区長より講評  

03

マレーシア・シンガポールの歴史

伊藤 萬結

1. はじめに

本講義を通して、シンガポールの歴史について学んだ。そのなかで特に印象に残ったのは、植民地支配と日本による占領期が、現在の国家形成に深く影響しているという点である。シンガポールは、イギリスの植民地下での発展を経て、多民族社会を形成しながら近代化を進めてきたが、第二次世界大戦中の日本軍による占領を経験することで、独立への意識を高める契機となった。本レポートでは、この植民地支配と占領の過程に焦点を当て、日本との関係性を踏まえながら、その意義を考察したい。

2. 植民地支配と占領

1819年、イギリスのラッフルズによってシンガポールが開港され、ペナン・マラッカとともに「海峡植民地」として統治が始まった。イギリスは貿易の中継地としてシンガポールを重視し、多民族社会を形成させながら効率的な植民地経営を進めた。植民地支配では、「分割統治」を実施し、シンガポールは経済的に発展する一方、民族間の分断を内包する社会構造が形成されていった。

しかし、第二次世界大戦の勃発により状況は一変する。1941年12月、日本軍はマレー半島北部に上陸し、約1100kmを自転車で南下、わずか2か月でシンガポールに到達した。1942年2月には、当時「東のジブラルタル」と呼ばれた要塞都市シンガポールが陥落し、イギリスの威信は失墜した。日本軍政下では、日本語の使用や宮城（皇居）への遥拝が強制され、さらに中国の抗日運動を支援したとして、華僑・華人に対し65万ドルもの罰金が科せられた。こうした弾圧的な統治は住民に深い苦しみをもたらした一方で、戦前まで絶対的だったイギリスへの信頼を失わせ、戦後の独立運動の機運を高める要因にもなった。

3. おわりに

講義の中で心に残っている話がある。先生がかつてシンガポールを訪れた際の体験談である。同じマレー系の人々であっても、日本に対する感情や記憶は大きく異なり、一方では「日本人がこんなところで何をしているのか」と敵意を示す人もいれば、もう一方では日本の軍歌を歌い、採れ立ての果物をくれた人もいたという。その話を通して、戦争や占領の記憶は一樣ではなく、個々の体験に根ざした多様な感情が存在することを強く感じた。教科書や資料から学ぶだけでは見えてこない、人々の生の声にこそ歴史の実像がある。机上の学びにとどまらず、現地の人々の語りや記憶を通して、歴史をより深く理解していきたい。

03 マレーシア・シンガポールの歴史

柴田 珠和

両国は関連する箇所も多いが、ここではそれぞれの視点から両国の特徴や歴史についてまとめる。地理的には隣国である一方、似て非なる点が多く存在する。

シンガポール

1. 地政学的特徴

マラッカ海峡の出口に位置する島国。一方、マレーシアとは橋（陸路）で繋がっている。かつては東京23区ほどの広さだったが、埋め立てによって拡大された。

2. 言語・民族構成

中華系74%、マレー系13.5%、インド系9%（2024年）^[1]
国語はマレー語。公用語として英語、中国語、マレー語、タミール語。^[1]
中華系は華人、中国語は華語とも呼ばれる。

3. 歴史的背景

1824年、正式にイギリスの植民地となる。^[1]その後、1942～1945年には日本軍による占領下に入る。この日本軍による侵攻が奇しくも独立運動の機運を高めるきっかけとなったとも。1959年にイギリスから自治権を獲得し、1963年にはマレーシア連邦に参加。^[1]
その直後、1965年にはマレーシア連邦側から追い出される形で分離、独立させられた。珍しい経緯を持つ独立の事例である。

4. 独立後の社会と課題

人材を最大の資源と捉えている。英語を事実上の第一言語とし、全住民がバイリンガルを目指す教育方針。第二言語は各民族の言語を選択する。
人口の6割のみが自国民で、残りの4割は外国人居住者であり、多文化共生の課題への対応が求められている。
生活インフラもマレーシアに依存している状況で、水さえもマレーシアからの輸入に頼っている。この状況に危機感を覚え、自国で水を生産する政策が実施されている。

マレーシア

1. 地政学的特徴

マラッカ海峡に面する国土を有する。主な国土はユーラシア大陸とボルネオ島にまたがる。ユーラシア大陸側の国土はマラッカ海峡に面する。国土は日本の約87%。

2. 言語・民族構成

マレー系約70%（先住民12%を含む）、中華系約23%、インド系約7%（2023年マレーシア統計局）^[2]
言語はマレー語（国語）、中国語、タミール語、英語。^[2]

3. 歴史的背景

1400年ごろにマラッカ王国が建国された。19世紀以降、イギリスの植民地となる。イギリスの植民地となっていた間、イギリスは民族ごとに役割を分担させ、少数のイギリス人で効率的に統治する「分割統治」政策を実施した。
1957年にマラヤ連邦として独立し、1963年にマレーシア連邦（シンガポール、英領北ボルネオ（サバ）及びサラワクとマラヤ連邦が統合）が成立した。^[2]

4. 独立後の社会と課題

マジョリティであるマレー系を優遇する政策が今でも実施されており、国立大学はマレー系を優遇する入試制度が使用されている。
特に9.11テロ事件発生以降、欧米諸国におけるイスラム圏への差別意識が高まり、イスラム圏からの留学生は欧米諸国を留学先に選択しづらくなった。そこで、公用語に英語が含まれるマレーシアに中東からの留学生が増え、教育産業も盛んである。

参考文献

- [1] 外務省, “シンガポール共和国 (Republic of Singapore)”, 10 9 2025. [オンライン]. Available: <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/singapore/data.html>.
[2] 外務省, “マレーシア (Malaysia)”, 27 3 2024. [オンライン]. Available: <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/malaysia/data.html>.

03 マレーシア・シンガポールの歴史

福島 都

講義を通じて、地理・歴史・民族・政治が複雑に絡み合う「シンガポールとマレーシアの関係史」の全体像が明確になった。まず象徴的な共通点として、イスラーム文化の影響（国旗の三日月や宗教的慣習）がある一方で、人口構成は両国で対照的だ。シンガポールは華人が多数を占める社会構成となっており、近年の統計でも市民・永住者の大多数が華人であることが示されている。一方マレーシアではブミプトラ（マレー系および先住民）が多数を占め、華人は重要な経済層を担うという二層構造が続いている。この民族比は、両国のナショナリズム、言語政策、優遇政策（例：ブミプトラ優遇）を理解するための基本的な枠組みになる。

歴史面では、ラッフルズによる開港以降の近代史だけでなく、東南アジアの古い交易ネットワークに遡る長い交流史を踏まえることが重要だ。加えて、第二次大戦期の日本占領はシンガポール社会に深い衝撃を残し、英領支配への不信や民族間感情の変化を助長した（シンガポール陥落と住民弾圧の記憶）。これらが1960年代の政治的対立と1965年の分離（マレーシア連邦からのシンガポール排除／独立）に至る背景として機能した。

経済と資源の観点では、資源に乏しいシンガポールが人的資本・金融・サービス産業に特化し、高度な都市政策（スマートシティ化、教育重視、英語を中心とするバイリンガル教育）で成長してきた点が際立つ。結果として一人当たり所得はマレーシアを大幅に上回り、国際的な富の集中を招いている（国別のGDP／一人当たりGDP統計で確認される）。同時に、水資源の問題は両国の現実的な接点を表す事例であり、歴史的な給水協定に依存してきたが、シンガポールはNEWaterや淡水化・下水再生で自給力強化に取り組むことで依存度を下げる政策を進めている。こうした「資源の脆弱性」と「技術的自立」の両立が、両国関係の実務面での緊張と協調を生んでいる。

政治的には、植民地期の分断統治（民族ごとの職業・居住の区分）は戦後の社会的亀裂を拡大させ、マレーシアではブミプトラ優遇政策が生まれた。一方シンガポールは民族的多数派が政策形成に強い影響を持つが、国家存立の脆弱性（国土・資源不足）から多文化管理と効率性を重視する一党優位体制が確立された。地域経済統合の試み（例：ジョホール州を核にしたイスカンダール／経済圏構想）や開発プロジェクト（Forest City等）の成否は、経済的依存と政治的警戒の交錯を示す現代的な試金石である。

総括すると、「分断と連帯」が両国関係の軸であるとの洞察は妥当だ。歴史的な支配構造と戦争の記憶が民族間の不信を残す一方で、地理的近接性・貿易・資源管理は現実的な協力を不可避にする。今後注目すべき観点は（1）民族政策とその再分配効果、（2）教育と言語政策が社会統合に与える影響、（3）水や土地・都市開発を巡る制度的取り決めと環境・投資リスク、の三点であり、これらを追うことで両国の中長期的な協調と摩擦の行方をより精緻に理解できるだろう。

出典（抜粋）

シンガポール統計局『Population in Brief 2024』、マレーシア統計局データ、World Bank（GDPデータ）、シンガポール国立図書館（NLB）資料（分離史・水協定）、主要報道（Forest City報道）

03 マレーシア・シンガポールの歴史

米田 真生

今回の講座を通して、マレーシアとシンガポールが地理的にも文化的にも近い存在でありながら、歴史の流れの中でそれぞれ異なる発展を遂げてきたことを学んだ。両国はいずれもイスラームの影響を受けており、宗教が人々の生活や価値観に深く根付いている点で共通している。一方で、植民地支配の過程で異なる政治体制や社会構造が形成された。マレーシアは立憲君主制を採用し、9つのスルタン州が輪番制で国王を務める独自の体制をとっているのに対し、シンガポールは都市国家として独立し、共和制を採っている。この「同じ文化的ルーツを持ちながらも異なる統治制度を築いた」という事実、植民地の影響と独立への道のりの複雑さを感じた。

また、日本とシンガポール・マレーシアとの関係についても多くの学びがあった。日本軍が統治していた時期、マレー人には比較的寛容に接する一方で、反日運動を展開していた華人には厳しい態度を取るなど、民族によって対応が異なっていたことを知った。戦後、シンガポールでは日本軍と日本人個人を分けて考える姿勢が見られ、民間人を保護したり、交渉を通して命を救ったりした日本人の存在もあったとされる。こうしたエピソードから、歴史は一面的に善悪で語れず、個々の行動や背景を理解する視点が必要だと感じた。また、講座で紹介されていた「日本が欧米列強を破ったことが、他国に独立の希望を与えた」という逸話からも、当時のアジア社会における日本の影響力の大きさを実感した。

戦後の両国は、分離と協力を繰り返しながら発展を遂げている。特にマレーシアはイスラーム圏の教育ネットワークを活かし、宗教的背景を持つ学生が安心して学べる英語による高等教育を提供しており、欧米での差別や服装制限を避けた学生にとって重要な学びの場となっている。一方でシンガポールは多民族国家としての多様性を生かし、経済・教育の両面で国際的地位を高めている。現在も両国は経済的な相互依存関係を保ちながら、水資源問題やデジタル経済の発展、環境政策などで協力を進めているが、一方で資源の公平な配分や外国資本の影響など、新たな課題も浮かび上がっている。

この講座を通して、歴史は単なる過去の出来事ではなく、「現在の社会の基盤を形づくるもの」とであると気づいた。マレーシアとシンガポールがそれぞれの立場から対立や分離を経験しながらも、協力を模索し続けてきた歩みは、異なる文化や価値観を持つ人々が共存するための大きなヒントになると感じた。将来、私自身が国際協力や異文化理解に関わる機会を持つときには、こうした歴史的背景や宗教・文化の文脈を理解した上で、人と人との信頼を育む視点を大切にしたいと思う。そのために、相手の文化や背景を尊重しながら対話を重ねる姿勢を忘れずにいたい。

03

マレーシア・シンガポールの
多文化社会の比較

大川 果音

今回のセミナーでは前回に引き続き平島みささんに講義をしていただいた。前回はマレーシアとシンガポールの歴史に関して学び、分裂に至った要因や文化の違いについて理解を深めることができた。今回のセミナーでは、マレーシア・シンガポールが分裂した後の各国の多文化社会の構成の仕方について違いを含めて学んだ。

まず共通する点として英領植民地であったことから分割統治に由来する住民の類型枠組みが現在の共生社会にも影響しているということである。

マレーシアは、大きくマレー系・華人系・インド系の3種族に分けられ、生業と居住地ともに種族ごとに分離されていた。独立後の新経済政策は、植民地時代の種族別生業によってできた経済格差を改善するために「マレー人優先政策」を行った。これは他と比べて珍しい事例であり、マレーシアの民族内訳として七割がブミプトラである中でマジョリティーを保護・優先するという政策である。逆にこの現状から、マジョリティーでも保護しなければならないほど経済格差が広がっていたことがわかった。しかし、マレー人が優遇される状況を利用しマレー系と華人系が手を組んで商売をする「アリ・ババ商法」が横行するなど、国全体としての経済格差は簡単には埋まらなかった。その後、国民開発政策を行い、マレー系の経済地位の向上やマレー語の普及の効果があったが、その反面他民族との調和が現在も課題として残っているとわかった。

また、シンガポールは人口の4割が外国人居住者であり、独立後はCMIO政策（多文化主義政策）を行った。このCMIOはChina・Malay・India・Othersの頭文字を取ったものであり、字のとおり全ての種族を尊重・配慮したものである。街中の看板などの表示も各言語の表記があり、私が一番印象に残っているのは広告の写真にはどの種族もいるように四人写っているということである。多文化共生を目指す政策を打ち立てるだけでなく、異文化民族がそれぞれ自分の文化のアイデンティティを理解しながらも互いに尊重できるようにするための対応が、生活の中に視覚的に存在することが非常に素晴らしいと思った。また、独立した後、自国には天然資源がなく第二次・三次産業に偏っていたため人的資源に頼るしかない状況を逆手に取り、強力な言語政策を行ったこともとても印象的であった。そして、この政策の「誰もが平等」ということは、教育や仕事において能力主義ということにつながる。これはマレーシアと大きく異なる点であると感じるが、これがシンガポールの国民平均取得がマレーシアの6倍になるほど経済成長した理由だと考えられる。これらから分かるようにCMIO政策により、共通言語として英語が普及し、外資系企業の発展により経済の活性化という結果が得られた。しかし課題としては、経済成長に伴う、移民や外国人労働者が増加するなど「アイデンティティの危機」があると学んだが、私はこの多様な文化が混ざり合い共存する「柔軟性」が、シンガポールの新しいアイデンティティとなるのではないかと感じた。

来月、現地でこの多種多様な文化が混ざり合い共存する社会を直接みるのが非常に楽しみである。

03 マレーシア・シンガポールの 多文化社会の比較

大塚 史絵奈

今回の事前講義を通して、シンガポールとマレーシアという非常に近接した地域でありながら、独立後の国家形成や社会構造が大きく異なっている背景には、単に民族構成が違うというだけではなく、植民地時代から続く対照的な意見の対立や政策上の選択の蓄積が存在していたことが分かった。特に、イギリス統治下における人種間の役割分担や階級差が、そのまま産業構造・職業分布・国家政策・国家の意思決定の方向性にまで長期的に影響しているという点が大きな学びであった。例えば当時、マレー系・華人系・インド系それぞれが担う経済領域が明確に分化していたことは「マラヤ連邦」という歴史的枠組みの中で固定化され、そのまま独立後の二カ国の産業構成に濃く影を落としている。プラナカン（海峡華僑）がイギリスとの商業領域を担っていたという歴史が、シンガポールが第三次産業中心の社会を強固に形成していく土台になっていたという点は特に印象に残った。またこうした歴史要因のもとで、マレーシアはマレー系を優遇する政策を取り続け、逆にシンガポールは人種平等を制度原理として採用してきた。この選択の差異が、同じ多民族国家でありながら、国民の生活文化がよりイスラム教中心へ向かっていくのか、多文化共存へ開いていくのかを左右したと言えると感じた。同じ地域・同じ植民地支配の出発点を共有していながら、歴史認識、制度設計、価値観の違いが国の方向性をここまで変えるという事実は非常に興味深いと感じた。

今回の講義で背景理解が深まったため、現地に行った際には、単に街を見るのではなく「なぜこうなったのか」を歴史の因果性の視点から観察できると思う。2カ国とも多民族・多文化を掲げているという表面的な共通点だけでは理解しきれない「歴史の分岐点の差」を体感したいと考えている。

現地訪問では、今回学んだ因果関係をもとに「実際の生活の中でどう感じられるのか」を自分の目で確かめたい。制度や政策の違いは講義で整理できるが、人々がどのような雰囲気の中で日常を送っているのか、その空気感までは実感として掴みにくい。講義では、シンガポールの広告には3～5人ほどが写されることが多く、その中に中華系・マレー系・インド系・ユーラシア系など複数の人種が意図的に配置されていると伺った。訪問時には、そうした広告や街の店の雰囲気、人々の価値観の違いを実際に観察しながら、「政策の違いはこういうかたちで日常に浸透するのか」や「多文化共存ってこういう身体感覚なのか」といった実感ベースの理解につなげたい。特に、宗教性と経済・実利的価値観がどのようにバランスを取っているのか、そしてそれが若い世代の態度や行動にどのように表れているのかは、自分自身の感覚と比較しながら確かめたいと考えている。

03

マレーシア・シンガポールの
多文化社会の比較

高橋 真衣

1. マレーシアの多文化社会

マレーシアの多民族社会について考えると、現代に至るまでの多文化社会の在り方には英国による植民地支配の影響が深く残っていることが分かる。英領植民地時代にマラヤには多くの移民が流入し、民族ごとに分割統治が行われていた。先住のマレー系は保守的で、住民の大部分が漁業など第一産業に従事していた。一方、移民の華人系民族は、海峡植民地で商業を営むエリート層と錫鉱山やパームヤシ農園で働く低賃金労働者層に分かれた。同様にインド系民族は、英語が話せるエリートが官僚を担う一方で、低賃金で働かされる労働者は土木建築やゴム・パームヤシ農園を営んでいた。英国からの独立後、マレーシアでは、植民地時代の種族別生業による経済格差を是正するため、「マレー人優先政策」を導入した。通常、多文化社会において、現代のアメリカのようにマイノリティを保護する政策を行う場合が多いが、マレーシアでは人口の多くを占めるマジョリティのマレー系を優遇することで経済の底上げを図り、経済的地位向上やマレー語の普及に繋がるといったメリットがあると考えられる。しかし、人口の少ない移民の種族にとっては社会進出の機会が制限され、生活しづらい環境が生じてしまうと考えられる。「マレー人優先主義」は現在も続いており、マジョリティを安定させることで社会全体の安定に繋がるのではないかと考えた。

2. シンガポールの多文化社会

シンガポールは独立以前、社会階級の差が大きく、労働環境や賃金の格差が見られたようだ。しかし、独立後に導入された「CMIO政策」と呼ばれる多文化主義政策は民族問わず全員を平等に評価し、能力主義の社会へと変化した。この政策は、マレーシアのマジョリティ優遇政策とは対照的であり、シンガポールの急速な経済成長のきっかけになったと考えられる。

また、華人系やマレー系、インド系、これらに属さないその他の民族がいる社会が一つの国としてまとまるために行われたのが英語教育を推進するために導入された「言語政策」である。この政策により、外資企業の流入による経済成長や国際的人材誘致の成功をもたらした。一方で、この政策は民族ごとの母語を話す機会が減り、民族的アイデンティティの揺らぎが生まれてしまったと考えられる。そのため、シンガポールは教育の一環として、お互いの異なる文化や表現方法を尊重するように呼びかけた。これは、自民族文化中心主義を防止し、多くの文化的影響を受けて生まれた伝統文化があること、多文化社会に生きていることに誇りを持たせることに繋がる。

このように、マレーシアと、シンガポールの取り組みは、共に多民族国家でありながら、政策の違いによって、それぞれ異なる文化社会を形成してきたといえる。今回学んだことから、多民族社会の中で国家の安定と成長をどう進めるかが重要であると考えた。

03 マレーシア・シンガポールの 多文化社会の比較

保立 美蘭

第2回事前研修会では、マレーシア・シンガポールの多文化社会の比較について学び、多民族が共に生活する社会の仕組みや政策、課題について知り、異文化理解の大切さを改めて感じた。どちらの国も複数の民族や文化が共存しているが、その成り立ちや政策のあり方には大きな違いがあることを学び、とても興味深かった。

独立前のマレーシアには先住民のマレー系、移民の華人系とインド系の種族が暮らしており、3種族の各地住居と生業を種族ごとに分離して生活していた。独立後のマレーシアでは、経済的に不利な立場にあったマレー系を支援するために「マレー人優先政策」が導入された。例えば、大学へ進学する際に受ける試験では、マレー系学生の方が低い成績でも合格しやすく、その他の民族の学生は同じ学部に入るために、マレー系学生よりも高い成績を求められる傾向があることなどから、他民族からは、不満が生まれた。さらに、新経済政策や国民開発政策ではマレー系住民と経済的に優位な立場にいた華人系・インド系住民との間の経済格差を縮小し、所得不均衡の是正を行い、マレー系住民の地位を向上させた。しかし、他民族住民が経済的に冷遇されると感じ不満や不平等感を抱く原因ともなった。これらのことから、マレーシアは多民族国家ではあるが、民族間の優遇措置がある点で「共生」というよりは「共存」にとどまっているように感じた。

一方、シンガポールはイギリス植民地時代に社会階級（ヒエラルキー）が存在していたが、独立後のシンガポールでは「CMIO（華人系、マレー人系、インド人系、その他）政策」を導入し、民族間のバランスを保つ社会づくりを進めている。英語を主要言語としながらも、各民族の母語（華語、マレー語、タミル語）も認め、バイリンガル教育を行っている点が特徴的である。また、「シングリッシュ」と呼ばれる方言的な英語ではなく、標準的な英語を話す運動を推進することで、国際社会での誤解のない円滑なコミュニケーションを実現している。こうした取り組みからは、民族間の公平さを重視し、互いの文化を尊重しながら国家の統一を保つ政策が行われている。

この講義を通して、マレーシアとシンガポールはともに多文化社会を形成しているが、マレーシアが「民族間の差を埋めようとする政策」を重視しているのに対し、シンガポールは「多様性を前提に共生を目指す政策」をとっている点が印象的だった。今後、実際に現地を訪れる際には、講義で学んだ政策が人々の生活にどのように反映されているのかを観察し、現地の人々との交流を通して理解を深めたい。また、異なる文化や宗教を持つ人々の考えを尊重し、互いに受け入れ合う姿勢を大切にしながらコミュニケーションをとっていききたいと思う。

03 マレーシア・シンガポールと日本との 環境分野での連携 海老田 ふう

はじめに

本講座では、2015年のパリ協定以降、国際的に不可欠な課題である脱炭素化やカーボンニュートラルの実現に向けたマレーシア・シンガポールと日本（主に千代田区）における環境政策および連携について学んだ。

1. 千代田区における環境政策

千代田区では、2050年ゼロカーボン、2050年ゼロ・ウェイスト、2030年ネイチャーポジティブという三つの目標の実現に向け、普及啓発活動に取り組んでいる（図1）。再生可能エネルギーを供給する「Eサイクルちよだ」や家庭向け再エネ購入制度「Pika」、循環経済を促進するmottECOやPASSTOなど、住民参加型の環境政策に取り組んでいる。

2. マレーシアにおける環境政策

マレーシアでは廃棄物処理が課題となっている。廃棄物処分場はオープンダンピング（野積み処分）で、悪臭の発生や地下水汚染などの環境問題を引き起こしている。また、廃棄物を拾い生計を立てる「waste picker」の存在もあり、環境面・経済・社会面の課題となっている。

以上の状況を改善するため、ゴミの容積を減らしエネルギーを生み出す焼却炉の導入が求められている。焼却施設の効果的な運用には適切なゴミ分別が不可欠であるため、マレーシアでは日本の自治体が実践する分別制度や資源循環政策に関心が寄せられている。

また、クアラルンプール市とさいたま市が連携し、クアラルンプール市の街区の脱炭素化支援も進められている。

3. シンガポールにおける環境政策

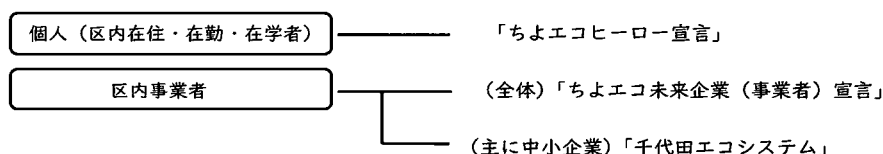
シンガポールでは「シンガポール・グリーンプラン2030」のもと、緑地面積の拡大、公共交通の利用促進、太陽光発電設備の強化など、持続可能性と経済成長の両立を図っている。また、環境・社会に配慮したグリーンビルの国内シェア8割が目指されている。環境美化に関しては、ゴミのポイ捨て、ガムの持ち込み等の違反行為に対し、罰金だけでなく清掃活動が課される。

さらに、日本との環境政策についての意見交換として、政策対話が定期的に行われている。

4. 感想

千代田区の住宅事情や都市構造を踏まえると、都市国家シンガポールの環境政策は、今後の千代田区における環境政策の検討や改善に活かせる可能性があると感じた。また、千代田区が政策を進めていくには、個人や企業が環境問題を自分ごととして認識することが不可欠であると考えた。今回の講義を通じて、自分自身の環境問題に関する知識の不足や、日本および世界の環境対策についての理解の浅さが明らかになったことが、その理由である。私は、環境問題と聞くと「高度な知識が必要なのではないか」と身構えてしまうことがある。しかし実際には、環境問題は生活に密接に関わるものであり、より簡単にわかりやすく伝える工夫が求められていると感じた。そのため、地域社会や学校教育を巻き込みながら、環境問題に関する普及啓発を進め、一人ひとりが理解を深められる環境を整えていく必要があると考える。

図1 千代田区における環境配慮行動の普及啓発の取り組み



環境マネジメントシステムの普及

03 マレーシア・シンガポールと日本との 環境分野での連携

小川 日南太

本講座では、東南アジアの中核であるマレーシアおよびシンガポールと日本が、環境分野においてどのように連携しているのかを体系的に学ぶ機会を得た。両国は都市化に伴う廃棄物処理やエネルギー需要の増大、気候変動対策といった共通の課題に直面している。日本との関わりは、単なる技術供与を超え、政策対話や成功モデルの共有を通じた包括的なパートナーシップへと進化している点に感銘を受けた。

まず、シンガポールとの連携についてである。同国は東京23区と同程度の国土ながら、2050年のネットゼロ達成を掲げる環境先進国である。

特筆すべき課題は廃棄物問題だ。経済活動の拡大に伴い家庭廃棄物が急増しており、統計によれば、建設廃材等の産業系リサイクル率は高いものの、食品やプラスチックといった生活系廃棄物のリサイクル率は依然として低い水準にある。ここに、高度な分別・リサイクル技術を持つ日本の知見が活かされる余地がある。

日本とは2014年以降、覚書に基づき定期的な「環境政策対話」を実施している。循環経済やプラスチック対策について継続的な議論が行われている事実は、両国が対等なパートナーとして課題解決に取り組んでいる証左である。

また、「シンガポール・グリーンプラン2030」と千代田区の政策比較も非常に興味深い視点であった。シンガポールは「自然の中の都市」を目指し、緑化や公共交通利用を推進しているが、千代田区も同様にゼロカーボンや環境配慮型の街づくりを掲げている。一国であるシンガポールと一基礎自治体である千代田区が、類似した指標で比較可能であるという事実は、同国がいかに高密度な都市機能を有しているかを物語っている。都市構造が類似しているからこそ、政策レベルでの相互参照が有効に機能するのだと理解できた。

一方、マレーシアとの協力においては、日本の都市開発の成功モデルが現地の実情に合わせて導入されている点が特徴的だ。特にクアラルンプール市（KL市）の事例では、東京都の制度設計が参照されているほか、特定の街区においては、さいたま市美園地区の「脱炭素先行地域」のノウハウが移転されている。

これは日本側が一方的に支援するというよりも、さいたま市で確立された「ゼロカーボン街区」という成功モデルを、KL市が自国の都市開発のひな型として積極的に採用しようとしている姿勢がうかがえる。行政だけでなく大学や民間を含めた連携体制が組まれている点も重要であり、都市の一部でモデルケースを作り周辺へ波及させる「面」での開発手法は、成長著しい同国において極めて有効なアプローチだと感じた。

本講座を通じて、環境分野の国際協力には、国の発展段階や都市の特性に応じた「最適解」が存在することを学んだ。シンガポールとは政策対話を通じた制度の高度化を図り、マレーシアとはモデル事業の横展開を通じた社会実装を進める。この複層的なアプローチこそが、アジア全体の脱炭素化を加速させる鍵である。日本の技術やノウハウは相手国への貢献のみならず、日本自身の政策のブラッシュアップにもつながる。環境問題という地球規模の課題に対し、こうした多面的な連携で共に解決策を模索し続ける姿勢が不可欠であると強く実感した。

03 マレーシア・シンガポールと日本との 環境分野での連携

櫻井 晃太郎

千代田区はリニア式の縦型ではなく循環型の経済を目指している。ネイチャーポジティブにも目を向けていて温室効果ガスや生物に影響の少ない地域を目指している。再エネに力を入れており、その電気が今の電気代よりも安く環境にいいなど、新しい形を将来の世代により良い地球を残すために奮闘している。しかし、地域や区が動くだけではどうしてもやはり限界があると思う。そのため個人向けの宣言も千代田区は出している。電気だけではなく、消費やリユース、移動手段にまで焦点を当て個人でもできることを一歩ずつやろうと言う姿勢が見える。また、区ではNPOや大学などにも連携をしている。最近では様々な地域がやっているのもう当たり前になりつつある。人間全てが持続可能な考え方の行動をできるようにしていきたいと感じる。千代田区が目指している「循環経済」や「ネイチャーポジティブ」の姿勢は、これからの都市が進むべき方向を先取りしているように感じる。単に温室効果ガスを減らすだけでなく、都市の生態系そのものを回復させ、人にも生物にもやさしい地域をつくろうとする視点は、私自身が取り組んできたSDGs教育や食の持続可能性の活動とも深くつながる。再生可能エネルギーへの移行や、その電力を住民が利用しやすい形で提供しようとする姿勢にも、未来世代により良い地球を残そうとする強い意志を感じる。

マレーシア・シンガポールとの環境、制度などは千代田区にもシンガポールにもあり、罰則の重みが日本とは違うと感じた。シンガポールのグリーンプラン2030では持続可能な経済成長を目指して取り組みがなされている。都市の中に緑地を増やすことや、自転車道の拡充によるCO₂排出の抑制、省エネや太陽光発電などのエネルギー、食料自給率を上げることなど、様々なものが含まれていた。それにより、シンガポールでは緑地が増えており、とてもいい行動だと考える。シンガポールのグリーンプラン2030との比較も興味深い。都市の中心に緑地を増やし、自転車の利用を促進し、省エネや太陽光発電を進めるなど、国を挙げて持続可能な社会を具体的な制度や罰則まで含めて徹底的に実装している点は、日本の都市政策と比べてもスピード感が違う。千代田区のように先進的な取り組みを行う自治体でも、シンガポールの制度設計や実効性から学べることは多いと感じた。

一方マレーシアでは、日本との経済協力として、脱炭素化支援をしている。カーボンニュートラル化の支援もして、積極的である。現在のマレーシアの環境は温室効果ガスの排出や廃棄物などが深刻である。その中でも食料廃棄物が40%以上を占めており、とても深刻であると考え。この点は、私が関心をもつ「食の持続可能性」そのものだと感じる。日本が脱炭素やカーボンニュートラル化を支援しているのは大きな意義があるが、食の廃棄問題こそ両国の協力で改善できる余地が大きいと考える。こうして日本の自治体（千代田区）とシンガポール、マレーシアを比較すると、どの地域でも「持続可能な未来づくり」は動き始めており、すでに「当たり前になりつつある」。だからこそ、私は人間すべてが持続可能な考え方を当たり前実践できる社会をつくりたい。そのためには政策だけでなく、教育、地域の連携、市民一人ひとりの行動が必ず結びついていく必要がある。私自身もその一端を担う人間として、この領域でより深く学び、実践し続けたいと強く感じた。

03 マレーシア・シンガポールと日本との 環境分野での連携

茂木 茜

1. はじめに

最近、ニュースでも環境問題がよく取り上げられている。日本国内だけでなく、世界中が協力しないと解決できない問題だ。千代田区の環境資料を見ると、私たちの街が「ゼロカーボン」や「ゼロ・ウェイスト」といった大きな目標を掲げていることが確認できる。

今回は、千代田区が取り組んでいる環境政策とシンガポールやマレーシアなどの東南アジアの国々がどう協力できるかについて考察する。

2. 環境問題のポイントと協力分野

資料によると、区の二酸化炭素排出の主な原因は、オフィスビルなどで使われる電力である。そのため、新しいエネルギーへの切り替えがいちばん大事な課題である。

- (1) **電気の使い方を教え合う**：日本は、電気を無駄なく使うための省エネ技術や、大きなビルでの電力管理のノウハウを持っているのだ。これは、発展が速く、新しいビルが増えている東南アジアの都市にとって、とても役に立つはずである。反対に、日本は東南アジアの国々がどうやって新しいエネルギーを広げているかというアイデアや工夫を学ぶことができる。互いの「得意なこと」を教え合うことで、より良い解決策が見つかると思う。
- (2) **ゴミを減らす工夫をする**：千代田区は、ゴミを減らして資源を大切に使う「循環経済」を進めている。特に食品ロスやプラスチックごみを減らす活動に力を入れている。東南アジアの国々も経済が成長する中でゴミ問題が大きくなっているのだ。千代田区が行っている「mottECO」などの具体的な取り組みや「ちょエコヒーロー宣言」のように市民に「参加したい」と思わせるようなアイデアを共有すれば、向こうの国々でもすぐに環境活動がひろがるきっかけになるはずだ。

3. まとめ：協力が生み出す効果

日本と東南アジアの国々が環境問題で協力することは、とても大きなメリットがある。

- (1) **問題解決のスピードアップ**：良い技術やアイデアを共有することでお互いの国の環境問題が解決するスピードがより速くなる。
- (2) **ビジネスと交流**：環境ビジネスを通じて、企業同士が協力したり、いろいろな国の人達が交流したりする機会が増える。

このように、環境分野での協力は地球を守るだけでなく、国同士の友好関係を深めることにもつながるのだ。